
魔術師黙示録

シブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師黙示録

【Nコード】

N3393Y

【作者名】

シブ

【あらすじ】

現代に生き残る魔術師。彼らは自身の目的を叶える為、日々を研鑽に費やす。ある者は名誉の為、またある者は、未だ見ぬ理想の為。そんな平穏の中、突如始まる魔術師同士の争い。かつての同朋や友人、見知らぬ術者との戦闘。

世界の根源と、そこから派生した世界。それらを繋ぐモノとは？

魔術師、一人（前書き）

何処からか発掘された、数年前に作りかけていた、あるゲームの原作を小説に再構成しました。

完成前に似たような、しかし完成度の高すぎるゲームが発売され、結局お蔵入りになった物です。

一応、場面毎での投稿にする予定なので、区切りに整合性が無いのはご容赦ください。

魔術師、一人

魔術。中世期のヨーロッパ諸国において、一流のペテンと評されたオカルト。確かに、それが何であるのか理解出来ない人々にとって、魔術などは『理解に値しない、不確かな物』と言えるだろう。気が付けば魔術師という職業は鳴りを潜め、自らそれを公言する人間は、只一人として存在しなくなった。

西暦2030年、世界中の学者らによって、あらゆるオカルトが否定されてきた現代。『科学によって証明出来る物は、オカルトには属さない』、それが一般的な思考回路へとなっていた。しかし、一般的であるという事は、それに逆行する存在もまた存在するというのが、世の常である。

「やれやれ、またオカルトの否定番組かよ……。いい加減、政府の広報も邪魔になってきたな。」

昼食後のコーヒーを飲みつつ、少年は一人ごちた。うんざりだと言つようにテレビを消し、カップを傾ける。

「桜花、俺は工房に行ってくる。時間が出来たら手伝ってくれ。」

「はい、師匠。時間が出来たら、ですね。」

厨房で後片付けをしていた少女に声を掛け、少年は部屋を後にした。師匠と呼んでいるが、二人は師弟関係ではない。そもそも、通常であれば逆の立場となる筈の実力である。少女がそういった呼び方をしているのは、自分が彼の使い魔である為だ。

使い魔、そう呼ばれる存在がいる。通例、使い魔とは魔力で呼び出し、具現化させた精霊のような物だ。鳥獣の類がそれに該当し、姿もそれに準じるのが一般的である。

しかし、少女は人型をしており、その佇まいは人間そのものである。いや、事実人間なのだった。かつて存在した、ヨーロッパ地方に伝わる魔女である。

そう、魔術は実在するのである。文明の発達と共にその地位は下落してきたが、かつては奇跡の業とも評された、れっきとした技術なのだった。

人間の文明進化により、奇跡と呼ばれた物はその殆どが衰退しており、一部を除いた魔術は、単なる『手遊び』へとその地位を落としてしまった。火を点ける魔術はライターへ、空を飛ぶ魔術は飛行機やヘリ、というのが現状だ。

それでも魔術を学ぼう、神秘へと至ろうとする者は数多く存在し、様々な国に於いてその教育機関が設置・準備されているという事実がある。彼らもその所属であるが、日本国内のそれとはまた違う国に住んでいる。本来、二人ともそういった場所に属するべきではないのではあるが……。

「それにしても、マスターは何を考えて……？ 私一人ならまだしも、あのような人物まで召喚するなんて。それはまあ、魔術的な防備と肉体的な防備、二つを揃える理由は分かりますが。よりもよって、アレを召喚するなんて……。」

今はいない人物を思い浮かべ、思索する少女。魔術師としては最高クラスと評される彼女ではあるが、物理的な格闘はほぼ不可能である。元々は王族の娘であつた彼女には、そのようなスキルは求められていないのだった。

かつての英雄、それを二人も召喚・使役するという魔術は、傍から見ればかなりの荒業である。精霊程度の召喚でさえ、鍛えられた魔術師でさえ、一日二日が限度であり、それ以上は行使しないというのが通常である。そもそも、死んだ人間に肉体を与え、かつ身辺に置くという時点で、かなりの魔力を必要とする。

例えるなら、10しか保存出来ない器で、100を必要とするエンジン回すような物だ。保存する側は常に全開でも、エンジンは出力不足となる。だが少年は、その問題点を一つの荒業で無視する事に成功した。

使い魔召喚

パラケルスス、中世ヨーロッパにいた医師であり、錬金術師の一人。彼は賢者の石という、錬金術の到達点を所有していたとされている。魔力の増幅器となり、金を作り出し、また不老不死となる薬の原材料とも言われるそれは、様々な人間の願望であった。

少年はまず、彼を召喚する事に決めた。理由は単純、それが持つ知識や道具を受け継ぐ為である。元より召喚の魔術以外が扱えなかった少年は、パラケルススの持つ錬金術の知識や道具を得て、魔術師としての完成度を高めようとしたのである。

「集え、古の霊よ。我が意に従い、顕現せよ。基に銀、礎には汝が書物。我が祖は安倍晴明。遍く照らし、闇を払え。我が名、基に於いて命ずる。その身をここに示せ！」

少年が使用した魔術は、代々彼の家に伝わる物だった。安倍晴明、平安の世で最強の陰陽師と呼ばれた人物の末裔である。土御門春明、それが少年の名前だ。

式神召喚の術式を応用したこの術式は、本来であれば全く機能する筈が無い。確かに降霊の為の触媒はあり、体裁は整っている。だが、降霊したモノの受け皿がそこには無い。もともと、霊を『儀式場に降ろす』のであれば、の話だが……。

春明が大規模な召喚を行う理由には、ある種の意地があった。式神使いとしては一流の彼だが、持っている才能はそれだけだ。どれだけ訓練をしても、風水や呪術には向かない。一族においては失格の烙印を押される身ではあったが、突如本家へと呼ばれたのだった。「春明、お前にロンドンからの紹介状が届いている。ロンドンの本院にて、魔術を学ばないか、という誘いだ。式神作りの才能を買ったようだが、お前の特異性には気付いていないらしい。餞別だ、これを持って少しはまともになって戻ってこい。期待しているぞ。」

渡された包みには、大量の遺物が入っていた。50を超えるそれらは、土御門家が今までに蒐集^{しゅうしゅう}した、過去の英雄らの持ち物である。春明自身は、分家の出である。それが本家の当主から餞別まで受け、期待するという言葉までかけられた。本家はおるか実家にも特別な感情を持たずにいた彼だが、その言葉を聞いた時は言いようのない感情を覚えたという。

「よろしかったのですか、あれを渡して。」

「ああ、蒐集を始めて早200年。扱える者は本家を始めとし、分家にも一人として現れなかったからな。あれらは元々、使う為に集めた物だ。才能を持つ者に預けるのは当然であろう？」

土御門当主とその妻は、誰もいなくなった部屋で話していた。当然、今は使えないだろうと考えていたが、それが間違いだったと思いは知るの、未だ先の事である。

ロンドンの学院から、正式な招待状が届いた。それを知った彼は、早速その準備へと移る。それがパラケルススらの召喚であり、大規模な魔術を使用する原因である。殆ど何も出来ない魔術師など、あの魔術大国においては劣等生以下だからであった。

「アウレオルス・フォン・ホーエンハイム、召喚に従い参上した。私を呼んだのはそなたか？」

眩いばかりの光と共に姿を見せたのは、初老の老人であった。眼は鋭く、探究の徒であるという意思を見せる彼。右手には書物を、左手にはビーカーやフラスコ等の実験器具を所持していた。それでも、最も目を惹くのは腰に下げた短剣である。

「単刀直入に言う。そのアゾットと賢者の石、両方を譲り受けたい。どちらも所有していた筈だな。」

史実など、英雄らにとつては何の意味も持たない。パラケルススの場合、賢者の石やアゾット剣等を実際には所有していなかったとする。だが、伝承でそれらの所有が確認されていれば、それは紛れ

もない『事実』として認識される。そしてそれらは全て、召喚される魂や肉体にも宿るのだった。

「なるほど、それで私を呼んだか。確かに、この二つがあれば、そなたの言う事は容易く行えるであろうな。では、これらの所有権を譲り渡そう。用件はそれだけであろうか？」

春明の説明を聞いたパラケルススは、賢者の石とアゾット剣を彼に手渡した。他の用向きは無いと知るやいなや、あっさりとその姿を消していく。春明はそれが、元々の場所へと戻ったのだと理解出来ていた。

新たな同居者

「兄さん、あれが戻ってきましたよ。何やら話があるようなので、リビングへお戻りください。」

隣の部屋で何やら行っていた春明に、桜花が声をかける。あれと
いうのは、もう一人の同居人で、彼女はその名前を口にする事はま
ず無い。いや、彼女が一方的に嫌っているだけではあるが……。

「学院以外でごまかす必要はないって、言わなかったか？つと、ク
ー・フリーンが戻ったって？早いな、珍しく……。」

彼が召喚したもう一人の英雄、それがクー・フリーンだった。ア
イルランドに伝わる神話の英雄であり、イギリス国内においては最
も有名な存在。召喚された英雄達はその土地での知名度に影響され、
存在としての強さに違いが生まれる。マイナーな英雄であればある
ほど、その恩恵が得られなくなるのだった。地脈と霊脈、その二つ
による魔力供給の影響、というのが最も有力な説ではあるが……。

そして、その観点から言えば、彼の英雄を選んだ春明の選択は正
しいと言えるだろう。

リビングへと戻った春明と桜花は、ソファーに座る一人の青年に
声をかけた。鮮血のような色合いの槍を抱え、その人物はそこに
いた。柄にはルーンと呼ばれる魔術文字が描かれ、その神秘性を一層
増している。

「ああ、さっきこの近くで見慣れない日本人を見かけてな。この
寮から出てきたらしく、あちこちで魔力の残滓を確認した。ここら
の散歩も終わったし、報告がてら戻ってきたわけさ。」

桜花は実の所、クー・フリーンを信用しきれていなかった。毎日
外をうろついては、適当な時間に戻ってくる。実体化を維持するだ
けで春明の魔力は消耗するし、外で何をしているかは定かではない。
学院では二人の護衛をしているが、講義の時間になると姿を消して

しまう。飄々とした態度は好ましくもあるが、それ以外は何一つ、褒めるべき所が見当たらないように思っているのだった。

春明とクー・フリーンが雑談をしている間、桜花は夕飯の準備をしていた。料理は殆ど出来ない彼女ではあったが、ロンドンに来てから最近、徐々にその腕を上げつつあった。二人に隠れて、少しずつ勉強をしている為ではあったのだが……。

「夜分遅くに失礼します。私、隣の部屋に入る事となった者で、ご挨拶をと思い伺わせていただきました。お時間の程、よろしいでしょうか？」

玄関からノックの音が聞こえ、春明が顔を出す。位置関係からすれば、リビングの二人より桜花が近い。しかし自分が出るよりは、本来の主である春明が対応するべきである、桜花はそう思い、敢えてそのノック音を無視する事とした。

「このような時間に来訪するご無礼、どうぞお許しください。来週より召喚科に編入する事となりました、遠野美幸と申します。何かとご迷惑をお掛けする事もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。」

「これはご丁寧に。自分も召喚科の学徒で、土御門春明と申します。失礼ですが、カバラ系の術者で？」

まがりなりにも一流の血統である春明は、日本国内の魔術師であれば、大抵は名前だけでも聞いた事があった。同門の陰陽師であれば知らない名は無いが、遠野という苗字に聞き覚えは無かったが故の問い掛けである。日本で召喚系統の術式といえば、カバラが一般的でもあるのだが……。

「いいえ、私は基本的にルーンの担い手です。名高き土御門の方と知り合えたのも何かの縁、もし至らない点などありましたら、ご教授願えると光栄です。」

「召喚にルーン……？セタ、ルーンで召喚なんて出来るのか？？」
奥にいたクー・フリーンに、春明が声を掛ける。ソファから立ち

上がる事もせず、彼は答えた。

「ああ、ルーンが魔力を持つ文字だったのは、前に教えたな。日本にも言霊って概念があるだろ？それと同じで、言葉と言葉の組み合わせで成り立たせる、それがルーンの基本だ。組み合わせ次第だが、大抵の事は出来るはずだぜ。最も、その年頃の嬢ちゃんがそこまでの技術を持つてゐるなら、だが。」

例えば、と扉の前へ歩み寄る。ドアノブに何らかの文字を書き、美幸を部屋へ入れる。急にドアが閉まり、何故か開けられなくなっていた。当然、誰も鍵をかけてはいない。クー・フリーンが文字を消してみると、その直後にドアが開けられるようになっていた。

「基本中の基本だが、こんなんだな。今は鍵をかけたわけじゃない、ただ扉と壁の接点を接着させただけだ。簡単な組み合わせでこんな芸当も出来るし、相手に強制の呪いをかける事も出来る。要は、使い手の魔力と知識次第って事だな。」

召喚以外の魔術に関しては素人同然の春明はまだしも、美幸でさえもその説明に聞き入っていた。ルーンの数だけならば自分の方が上という顔だが……。

「ねえ、あんた一体何者よ？桁外れの魔力量だし、佇まいが人間とは思えない。それに、あの槍……。」

クー・フリーンが立ち上がり、ドアの付近からもリビングが見渡せるようになっていた。そのソファに立ってかけられていた槍、それに彼女は反応したのだ。

「何、単なるルーン使いさ。この坊主の護衛でね、槍が得意ってだけだ。最も、あれだって普通の槍とは違うがね。」

得意げな笑顔を見せ、彼は笑った。槍が得意、などというレベルではない。投げられた槍は例え地球の裏側にでも届き、その標的に死に至らしめる魔槍、ゲイボルグの担い手である。そしてその槍こそ、クー・フリーンを英雄たらしめる所以でもあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3393y/>

魔術師黙示録

2011年12月21日20時51分発行